

特別講演

人はみな、育てられて育つ

鯨岡 峻（中京大学）

1. はじめに

2. 人間は内部に自己矛盾を抱えた存在である

自分を尊重して欲しければ、相手を尊重できなければならない。自分は自分でありたいのに、自分ひとりだけでは生きていけず相手を必要とする。人間が抱えるこうした両義性（自己矛盾性）が、家族関係を考えるときの基盤となる。

3. 新しい発達の見方：＜育てられる者＞から＜育てる者＞へ

人は育てられて育つ。いま育てる側の人も、かつては育てられて人であり、いま育てられている人も、いずれは育てる人になる人である。つまり、「人は育てられて育つ」という命題は、世代間で循環するということであり、またそこを離れては考えられないということである。だが、育てられる人も育てる人も、それぞれに主体であり、上にみた両義性を抱えた存在であるから、両者の関係、ひいては家族関係は喜怒哀楽の坩堝から逃れられない。家族であるから安心と幸せが得られると同時に、家族であるからこそ葛藤と苦しみから逃れられないのだ。

4. 各自の＜自分の心＞は共に生きる他者たちとの関係の中で変容する

各自の心は自分のものでありながら自分では作れないという不思議の中にある。自分の心には周囲の人の自分に対する思いが流れ込む。自分に自信があるかないか、自分で自分を肯定できるかできないかは、自分の問題なのに、自分では決められない。それらはすべて周囲の評価にかかっている。ここにも家族関係が本人の心のありようを深部で規定する理由がある。前向きに生きる上に決定的に重要な「自己肯定感＝健康な自己愛」は、家族（身近な他者）の愛が鍵を握っているというのもその一端である。

5. なぜ関係発達の視点が子育てや保育や看護に必要なのか

- (1) 子どもの心を育てるという視点が切り開かれる
- (2) 育てる人もなお人生の途上にあるという視点が切り開かれる
- (3) 一個の主体として育つことが、「育てられて育つ」ということの究極の目標であるという視点が切り開かれる
- (4) 人間関係を相互主体的な関係としてみる視点が切り開かれる
「相手を主体として受け止め、こちらの主体としての思いを相手に伝える」。これが子育てであれ、看護であれ、そこでの人間関係の基本でなければならない。

6. 看護の場面をエピソードに描く

看護を、主体である患者と主体である看護師の相互主体的な関係と捉えるとき、看護師が黒衣のようなこれまでの記録のあり方の問題が見えてくる。客観主義的な枠組みのために事実経過しか描かないようでは、人の生き様が伝わらない。一人の患者がいろいろな思いを抱えて生き、一人の看護師がいろいろな思いを抱えて看護している現実が見えてこない。それを見えるものにするには、関与の営みをその当事主体である看護師自身がエピソードに綴ることが不可欠である。